

## 週 1 回使用糖尿病治療薬のコンプライアンス低下防止策の効果

石黒 美幸<sup>1)</sup>、谷 健二<sup>2)</sup>、片山 珠季<sup>3)</sup>、前田 守<sup>4)</sup>、長谷川 佳孝<sup>4)</sup>、月岡 良太<sup>4)</sup>、森澤 あずさ<sup>4)</sup>、大石 美也<sup>4)</sup>

- 1) 株式会社アメニティ・プランニング つつじ薬局大国
- 2) 株式会社アインファーマシーズ アイン薬局 吹田店
- 3) 株式会社アインファーマシーズ
- 4) 株式会社アインホールディングス

【目的】糖尿病は治療薬の長期服用が必要であり、服用負荷の増加が懸念される。解決手段の一つとして、DPP-4 阻害薬や GLP-1 受容体作動薬の週 1 回使用薬剤（以下、週 1 薬とする）があるが、使用・投与忘れ（以下、忘れとする）によるコンプライアンス(Comp.)低下が懸念される。そこで、週 1 薬の使用状況と患者が実施している忘れ防止策の効果を検証し、薬局薬剤師の果たすべき役割を考察した。

【方法】大阪府で当社グループが運営する保険薬局 5 店舗にて 2018 年 11 月 8 日～2019 年 1 月 31 日にマリゼブ<sup>®</sup>錠とザファテック<sup>®</sup>錠を調剤した患者（錠剤群）61 名と、トルリシティ<sup>®</sup>皮下注を調剤した患者（皮下注群）61 名に「忘れ」に関するアンケート調査をした。項目は「経験の有無」「頻度」「防止策」とした。結果は、有意水準 0.05 のカイニ乗検定と Fisher 正確確率検定で解析した。なお、本研究はアイングループ医療研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：AHD-0002）。

【結果】両群とも 17 名（27.9%）に忘れの経験があり、その頻度は錠剤群のほうが高かった。防止策は、両群とも「カレンダー管理」が最も多く、「服用曜日の決定」「ケース管理」「家族の声がけ」なども実施されていた。錠剤群と皮下注群におけるそれぞれの防止策での忘れ発生率は、「カレンダー管理（37.5%、33.3%）」「家族の声がけ（66.7%、42.9%）」では「対策なし（35.7%、23.1%）」よりも高く、「使用曜日の決定（0%、20.0%）」「ケース管理（0%、0%）」では低かった。

【考察】忘れ防止策の効果は、作業が増える「カレンダー管理」や他者に依存する「家族の声掛け」では期待できないが、普遍的基準の「使用曜日の決定」や「ケース管理」の効果は高いことが示唆された。したがって、薬局薬剤師は、Comp.の低下が懸念される週 1 薬などについては、忘れへの注意喚起だけでなく、その防止策が普遍的基準に基づくものか等の内容まで確認することで、Comp.向上に貢献できる可能性が考えられる。

（第 13 回日本薬局学会（2019 年 10 月、神戸）にて発表）